

2016年度 神戸大学 海外インターンシップ報告
中長期日本文化紹介型・ハンガリー（ブダペスト）



国際文化学研究科 博士前期課程1年

目次

1. インターンシップ概要 p. 2
2. 活動内容 p. 3
3. 日常生活 p. 8
4. ハンガリーにおける日本語・日本文化と国際交流基金 p. 11
5. 学んだこと p. 13
6. 今後に向けて p. 14
7. 最後に -感謝の言葉 p. 14

1. インターンシップ概要

◆ 研修先

国際交流基金 ブダペスト日本文化センター

【国際交流基金は、①文化芸術交流 ②日本語教育 ③日本研究・知的交流という、主に3つの国際交流事業を通して、日本語・日本文化発信を行っている。現在、海外23カ国24カ所に拠点があり、研修先センターは中東欧で唯一の事務所である。】

◆ 研修期間

2017年2月27日（月）～3月10日（金）

◆ 目的

- ・日本語教育・日本文化発信を行う国際交流基金の中東欧における拠点であるブダペスト日本文化センターが、どのような役割を担い、活動しているのか現場で体験すること。
- ・そこから、中東欧・ハンガリーにおける日本語・日本文化のプレゼンスを感じとり、自文化を見つめ直すと同時に、自身の副専攻である日本語教育の知識を高めること。
- ・一つの組織で働くという経験をするにより、将来のキャリアへの意識変革を行うこと。

◆ 主な活動内容

- (1) 文化事業への立合い・補助業務
- (2) 日本語教育関連（大学の授業・日本語講座）への立合い・補助業務
- (3) 研修先センター事業広報および文化備品管理に関する業務



←センター受付



2週間お世話になったデスク →

2. 活動内容

◆ 文化事業への立合い・補助業務

本インターンシップにおいて参加させていただいた文化事業（外部会場での開催）は、以下の4つであった。

- (1) 映画「阪急電車」上映会
- (2) 文化講演会「百人一首」
- (3) 派遣先センター助成事業・シンポジウム “Japonisme in Global and Local context”
- (4) 国際交流基金の海外巡回展「未来への回路」

上記からもわかるように、国際交流基金は非常に多様な文化事業を行っており、主催・共催や助成、協力のようにその関わり方も異なる。(1)映画上映会は、現地の映画館で、(2)文化講演会は、日本語学科を有するエトヴェシュ・ロラード大学(ELTE)との共催、(3)のシンポジウムは、ハンガリー随一のアジア・日本コレクションを有するホップ・フェレンツ美術館に対する助成事業など、その事業の多くが、センターだけでなく他の施設、機関と密に関わりながら行われていた。

その他にも、研修期間には、城西国際大学の学生たちによるセンター及び日本語講座の訪問や、日本考古学専門の教授による日本関連学生向けのセミナーなど様々なイベントが催された。

主な業務として、会場設営や立合い、広報用の写真撮影などがあつた。準備から、どうすれば来場者にとって心地よい場をつくりだせるのかということを考えながら、テーブル・イスの配置や来場者への声かけなどを行うよう心がけた。

何よりも印象的だったのは、どの催し物でも、来場者の興味や熱意を感じ、満足そうな様子だったことである。「とても良かった!」「ありがとう」と笑顔で言ってくれる方もいて、私自身も嬉しく、その言葉や表情がイベントの成功を意味しているのだと思うと同時に、基金が果たす役割の大きさを感じた。



↑考古学セミナーの様子

とても分かりやすく面白い講義に

学生たちも満足そうだった!



←好きな百人一首かるたを持って帰れる

と聞いて熱心に選ぶ来場者

センター助成の文化事業である

ジャポニズム美術の展覧会 →



◆ 日本語教育関連（大学の授業・日本語講座）への立合い・補助業務

私自身、国際文化学研究科で日本語教師養成サブコースを履修していることもあり、文化事業に加え、日本語教育関連の業務にも携わらせていただいた。

(1) エトヴェシュ・ロラード大学(ELTE) 日本語学科の授業への参加

授業は、①ゲーム ②軽いおしゃべり ③ディスカッション で構成され、事前に提出しておいた案 ①あっち向いてホイ ②好きなこと・趣味 ③日本の良い所・悪い所または変な所 を採用していただいた。

ディスカッションでは、日本の良い所として「食文化の多様性」「人の優しさ」「伝統と現代の融合」など、悪い所として「意見をはっきり言わない」「教育制度」など、たくさんの面白い意見が出た。



クラスはN3 レベルということだったが、学年の制限がなく、学生の日本語学習歴・日本滞在経験も異なっていた。しかし、概して学生の日本語レベルやモチベーションが高いことに非常に驚いた。それでももちろん、グループ内で日本語のみでの会話が難しい時があったが、日本人だけでなく、比較的能力の高い学生が、話すのがあまり得意ではない学生に助け舟を出すというような場面もみられた。授業は終始明るく、学生1人1人が発言しやすい環境がつけられていた。

(2) 夜間日本語講座への立合い・補助業務

研修先センターでは、月曜から木曜までの週4日、夜間日本語講座が開かれている。受講者の年齢層は幅広く高校生から社会人、退職された方までが、レベル別のクラス（G1~G5）で日本語を学んでいる。各クラスは1コマ90分の授業を週2回受ける（日本人講師・ハンガリー人講師が1コマずつ担当）。主に使われて

いる教科書は『できる』シリーズで、ハンガリー日本語教師会とセンターにより製作されたものである。ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）をもとに構成されている点、日本のみならずハンガリーの文化も取り入れられており、日本語を学びながら自文化についても考えたり、互いの文化を理解したりすることができるようになる異文化間コミュニケーション能力の育成も目指すという点で、非常に画期的な教材である。学習者は、毎回の講座前に、ネット上で「反転動画」を視聴し語彙や文法に関する説明を理解したうえで、授業の中でその知識を応用し練習するという授業形態になっている。こうした教材の作成・改善にも、センターが関わっていた。



私は、計8つの授業に参加させていただき、学生の中に混ざって会話をしたり、先生の補助業務を行ったりした。観光に関するプレゼンテーションを行う授業では、神戸の紹介をさせていただき、写真ベースのスライドをつくり分かりやすく楽しい発表をするよう心がけた。神戸のハンガリー料理店を紹介すると、学習者は「本当?!」「すごーい!」と驚いたような反応だった。

また学習者からは、異人館や有馬温泉のお湯の色に関する質問、ヨーロッパと比べて日本に像が少ない

のはなぜかといった、着眼点の面白い質問が出た。

参加した授業では、日本語でハンガリーの紹介をする、日本とハンガリーの文化について考えるという内容が多かったように思われる。この活動は、とても実用的であり、上に述べた異文化間コ

ミュニケーション能力の育成とも関わっている。

ハンガリーには、2017年3月時点で第2外国語として日本語を学べる高校が9校、大学が11校（うち日本学科を有するのは2校）ある。こうした学校に通ってはいないが、日本語を学習したいと考え、研修先センターの日本語講座に通う人は多い。学習者の受講動機は様々であるが、仕事



の後すぐにセンターへ来て講座に出席したり、図書館で読書・自習したりする人も多く、彼らの向上心には感心するばかりだった。

センターには、長期の総合コース（レベル別）の他にも、初心者向けのひらがな・カタカナから学ぶ準備コース、中上級者向けのトピックコース（「本を読もう」「日本語で書こう」など）のような短期コース、文化を体験しながら日本語を学ぶコースも開講され、非常に充実したプログラムが用意されている。

さらに、センターでは月1回、夜間日本語講座の講師会が開かれ、普段異なるクラスを担当する先生の間で近況報告や課題共有・意見交換をする場が設けられている。



今月の議題は「ポートフォリオの使い方」
ディスカッションにも参加させていただいた。

研修期間中、ハンガリーで日本語教育に携わっていらっしゃる多くの先生方とお会いすることができた。ハンガリーには母語話者教師が少なく、学習者が日本に関われるチャンスも少ないという制約がある中で、いかに学習者のためになる授業やイベントをするのか、情報提供をするのかを、1人1人の先生が非常に工夫されていると感じた。そして学習者ととても距離が近く、信頼関係が築かれているというのも印象的だった。

◆ 研修先センター事業広報および文化備品管理に関する業務

研修では、主に広報業務を体験させていただき、(1)センターが貸し出している文化備品の在庫管理とウェブページ情報の更新、(2)日本語能力試験(JLPT)の中等教育機関向けのチラシ作成を行った。



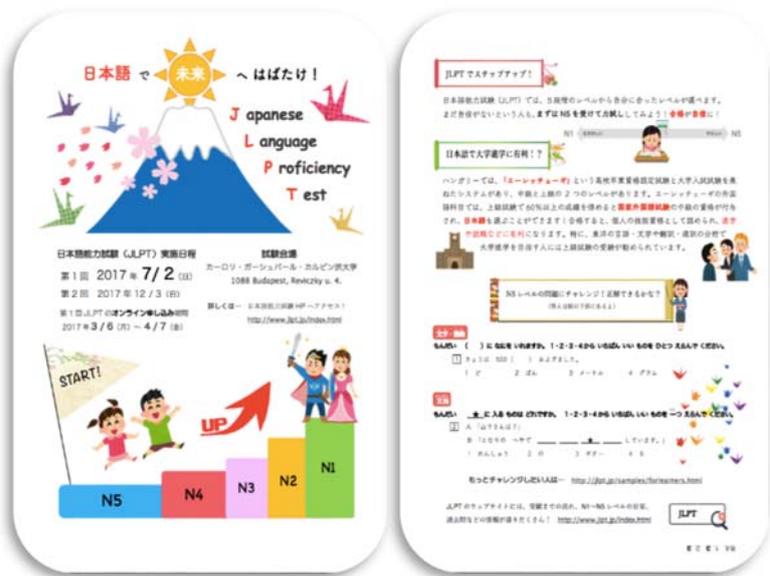
(1) センターでは、浴衣や日本のおもちゃ、書道セットなどを、一般の方や教育機関向けに貸し出している。このような文化備品の写真を撮影し、何がいくつあるのか、貸す側・借りる側が把握できるようなカードやリストを作成した。また、文化備品のいくつかはセンターのウェブページで一般公開されてお

り、借りてみたいと思うような写真を新たに撮影して更新するという業務も行った。

- (2) 主に、小学生や中学生くらいの日本語学習者向けに、日本語能力試験(JLPT)のチラシ案を作成するというタスクを与えられた。学習者に興味を持ってもらう、あるいはチャレンジしたいと思ってもらうには、どのようなデザインにすればよいのかから考えることは非常に難しかった。 JLPT (まずは N5) を日本語学習のステップア

ップやモチベーションの維持のために受けてもらうというねらいから、試験という堅苦しいイメージを与えないようにしつつも、 JLPT を受けるメリットを伝えるために、イラストや文面を工夫したり、簡単な練習問題を入れたりした。また、

JLPT だけでなく、ハンガリーにおける外国語政策・日本語教育に関する情報を調べたことで、説得力のある内容になったと思う。



◆ その他の活動

以上報告した業務の他に、任意プログラムとして、在ハンガリー日本大使館で開かれた国費留学生総会にも出席させていただいた。日本の文部科学省の奨学生として日本へ留学した学生、そして今年留学するハンガリーの学生たちが集まり情報交換や交流をするためのものである。大使館推薦の奨学生として日本へ行くことができるのは、ハンガリーで7名という非常に狭き門である。そのぶん会場にいた学生たちは本当に優秀で、日本語能力はもちろんのこと、将来日本とハンガリーの架け橋になりたいという志の高い人ばかりだった。

3. 日常生活

◆ 余暇の過ごし方

「ドナウの真珠」とも呼ばれるブダペストは、街並みを見ながら散歩するだけでも楽しく、見どころが盛りだくさんの街だった。ブダ王宮や国会議事堂のような観光地はもちろんのこと、物価が安いので、美術館やカフェ巡り、映画・オペラ・ミュージカル鑑賞、中央市場散策など様々な楽しみ方ができる。



↑ 中央市場

← ブダ側のマーチャーシュ教会

ペスト側の聖イシュトヴァーン大聖堂 →

平日、インターンシップ外で時間があつた時は、街の散策やドナウ川沿いの夜景を見に行ったり、カフェに行ってまったり過ごしたり、映画を見に行ったりした。また、センターの方々と食事に行ったり、日本語学科の先生方、学生たちと「廃墟バー」と呼ばれる地下バーにお酒を飲みに行ったりもした。

休日には、ヤーノシュ山へのハイキング、ドナウ川クルーズを体験したり、隣国ポーランドへ旅行したりした。



← 滞在中行われていたフランコフォニー映画祭

@Uránia Filmszínház という映画館（豪華すぎる！）

1400 フォリント(=約 600 円)で 1 作品見られる！

センターの方々とハンガリー料理レストランで →
私が食べたのは”Rakott Krumpli”というハンガリーの家庭料理。
ジャガイモのグラタン風。ボリューム満点で約 250 円という安さ



◆ 食事

名産パプリカを使った伝統料理が多い。スープや煮込み料理、お肉料理が有名で、値段が安いので最初は何品も注文してしまいがちだが、とにかく量が多い。お店によっては、ハーフサイズを半額で提供してくれるところもあるので聞いてみるといいかもしれない。



← 名物料理「グヤーシュ」。お肉やジャガイモなどが入ったパプリカのスープ。

果物たっぷりのレモネードも有名！

甘いもの好きにはたまらないケーキ →

ハンガリー起源「ドボシュトルタ」&

ミルフィーユのような「クレーメシュ」



◆ 買い物

普段の食料・飲料水や日用品は、街に点在する” SPAR” や” prima” のようなスーパー、または” ABC” というコンビニのようなお店で事足りる。パプリカペーストやワインのようなお土産も安く手に入る。営業時間は、朝 6 時から夜 22 時までのお店が多い。（日曜日は短縮営業の場合あり）

◆ 言語

ハンガリーの公用語はマジャール語（ハンガリー語）だが、私はほとんど英語を使用していた。基本的に、若い人は英語が話せるが、地元のお店や年配の方には通じないことがある。「こんにちは」「ありがとう」のような基本的なハンガリー語に加えて、ABC などで袋（有料）を買いたい時に ” Kerek táská (「ケレクタシカ」に近い発音；意味「袋ください」) ” のようなフレーズを覚えておくと便利。

◆ 交通機関

市内移動は、基本的にトラム（路面電車）と地下鉄、時々バス。ブダペストの地下鉄 1 号線は 1896 年に開通し、地下鉄として世界で唯一世界遺産にも登録されている。ドナウ川の下を通る路線もある。また、地下鉄の駅が、アールヌーヴォー風やモダンなデザインなど路線に



よって異なっているのも面白い。

また、トラム4・6号線は、ドナウ川に架かるマルギット橋上を走っていて、車窓から見える景色は本当に綺麗だった。

滞在中、一部の駅が工事のために封鎖されており、地下鉄の代わりに船でドナウ川を渡ることもできた。



◆ 治安

比較的安全だと感じた。主観としては、西欧諸国よりも治安はいいと思う。もちろん避けたほうがいい通りやエリアはあり、特に夜中の一人歩きは要注意。

◆ 宿泊先とその周辺

研修先センター@Oktogon まで徒歩圏内のゲストハウスに滞在。大通りから1本外れた通りに位置しており、夜中や週末に少し騒がしいと感じることはあったが、治安面は比較的好かったと思う。私は宿泊先を決めるのが少し遅く、選択肢がそれほど多くなかったが、それでもダブルルーム（シャワー・トイレは共用）に2週間宿泊して、270ユーロ（＝約32000円）くらいと安かった。

センターおよびゲストハウス周辺は、スーパーやABC、ファストフードからレストランまで何でも揃っていた。メキシコ料理やトルコ料理のような多国籍料理もありテイクアウトも可能なので、お昼を手早く済ませたいときに便利。

◆ 番外編：旅行（ポーランド・クラクフ）

土日を利用して、友人がいる隣国ポーランドのクラクフへ旅行した。ブダペストからクラクフまでは、バスで片道7時間程度かかるが、往復2000円くらいと激安。クラクフは「ポーランドの小京都」と呼ばれ、中世ヨーロッパにタイムスリップしたかのような可愛らしい素敵な街並みが味わえる。ヴィエリチカ岩塩坑は、クラクフからバスで約30分の世界遺産。ガイドツアーでないと入ることができないが、美しい塩の彫刻芸術やポーランドの歴史を感じることができた。

また、ハンガリーからオーストリア（ウィーン）へは列車で2時間程度、他の周辺諸国へのアクセスも良いようなので時間とお金が許せば行くべきだと思う。



4. ハンガリーにおける日本語・日本文化と国際交流基金

【ハンガリーの日本語学習者】

ハンガリーの日本語教育現場を見て最も驚いたのは、予想をはるかに上回る学習者の日本語能力・モチベーションの高さだった。もちろん私が2週間で接した学習者はごくわずかであっただろうが、中には日本へ行ったことがない、もしくは数ヶ月しか滞在したことのない学習者でも、違和感のない流暢な日本語を話していた。

研修期間中、ハンガリーの日本語学習者について少しでも知りたいと思った私は日本語学習に関するアンケートを作成し、エトヴェシュ・ロラード大学(ELTE)で日本語教育に従事する先生にご協力いただき、学生22名からの回答を得た。

日本語の良さを学習者に聞いてみたところ、「日本語の音や響きがきれい」「漢字が好き」という意見が多かった。日本語に初めて触れたきっかけはアニメや漫画などのサブカルチャーであったという人が多いものの、文学や歴史などの伝統が重んじられるハンガリーの教育が影響しているのか、日本近現代文学や百人一首、邦楽などの伝統文化もかなり人気であるという印象を持った。大学の日本語学科では、日本語学、日本文学、日本美術・ジャポニズムに関する研究をしている学生が多かった。

また、日本語学習の醍醐味として多く挙げられたのは、「ハンガリー語とは異なる言語である日本語を学ぶことで、異なる新しい日本文化や日本人の考え方を知ることができる」ことだった。これは日本語に限らず、外国語学習に共通していえることだと思う。

そして、「日本語を将来のキャリアに役立てたい」と回答してくれた学生は全体の約8割にもものぼった。そのうち、翻訳家や通訳になりたいという人が最も多く、日本企業に就職したい、ハンガリーの外務省で日本語を使いながら働きたいという人もいた。その一方で、「日本に行ったことがある」と回答してくれたのは、わずか3割ほどであり、日本に行きたいという人は多いにもかかわらず、その門戸はまだ十分に開かれていないのだと感じた。

しかし、今年(平成29年)の2月に、日本・ハンガリー間でワーキングホリデー制度が開始されたことをハンガリーの学生から聞き、彼らが日本へ滞在するチャンスや日本・ハンガリーの架け橋として活躍するきっかけが今後さらに増えることを祈っている。

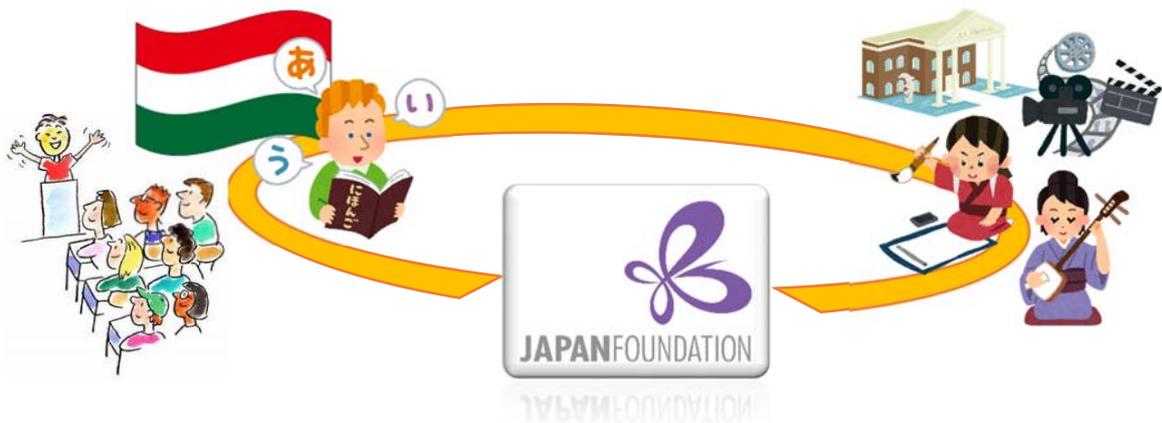
【国際交流基金ブダペスト日本文化センターの役割】

こうしたハンガリーで、国際交流基金ブダペスト日本文化センターが果たしている役割は「きっかけづくり」であると感じた。ハンガリーで日本の言語・文化に興味がある、また学んでいる人たちは、日本に関するある分野に精通する教授やプロ、施設などへのアクセスが必ずしもあるとは限らないし、自ら触れられる機会も少ない。その二者を結びつけ、互いに出会わせるきっかけ・場を提供するのが同センターだと思う。私が携わせていただいた文化事業、日本語講座、文化備品の広報業務もすべて、日本に興味がある人と専門家や日本関連媒体をつなぐ「きっかけ」だといえる。センターにある図書館（約9000冊所蔵）も、ハンガリーの大学や本屋では置いていないような日本に関する書籍にアクセスできるという点でその役割を果たしており、利用者からも「大学の図書館よりも日本の本が多いから」「ここでしか読めない本があるから」来るのだという声があった。



また、ブダペスト日本文化センターについて忘れてはならないのは、中東欧（計13ヶ国）における唯一の国際交流基金の拠点であるということである。広域担当事務所として、中東欧に向けて情報提供と同時に、ネットワークの強化にも努めている。「中東欧日本語教育研究会」の開催や、「中東欧日本語教育プラットフォーム」というものがウェブ公開されており、日本語・日本文化関連のイベントカレンダーやオンライン日本語講座のような教育リソースが共有されている。

本インターンシップを通して、国際交流基金ブダペスト日本文化センターが関わる、想像以上に幅広い事業・業務を現場で体験させていただき、なくてはならない日本語・日本文化の発信地になっていることを強く実感した。



5. 学んだこと

【ハンガリーの日本語教育と国際交流基金】

既に4. で述べたように、ハンガリーにおける日本語教育を現場でみさせていただき、日本語学習者・先生方の熱意や能力の高さ、同時に抱えている課題もみえてきた。その中で、ブダペスト日本文化センターに求められている役割や活動を自ら考え学ぶことができた。

【組織の一員として仕事をすること】

社会人経験のない私は、インターンシップに参加するまで、「2週間で何かすごいことを成し遂げなくてはいけない」と気負いしすぎていた部分があった。センターの方々にアドバイスをいただき、実際に就業体験をして気づいたことであるが、何をするにも大体のことは1人でするわけではない。同じ目的や目標のもと、それぞれ個人でしていた仕事が1つにまとまるというイメージが近いように感じた。もちろん自分1人でできなくてはならないこともあるだろうが、困ったことやわからないことは自分1人でもがくのではなく、先輩や専門の方に協力をお願いして対処することで、情報共有ができたり信頼関係が築けたりすることもあるのだと思った。

また、ブダペスト日本文化センターは少数精鋭で幅広い業務を行っているので、1人1人の仕事範囲も広く裁量が大きいということを実際に体感できたのも大きな収穫であった。私も文化事業・日本語教育・広報と、本当に様々な業務に携わらせていただいたが、複数の仕事を同時進行でこなすことの大変さややりがい、社会人として必要な要素も学べた有意義な2週間だった。

【日本人としての自分】

私がこれまで訪れた国の中でハンガリーは、見かけた・出会った日本人が最も少ない国だった。そのような国における自分はいわば日本の代表であり、自分1人の言動が日本のイメージを大きく左右する場合もある。そのぶん日本人としての責任や自覚を持たなければならないし、発信の力も大きいと思う。この2週間、日本語学習者や日本に興味を持ってきている現地の人と交流するときに、ハンガリーという地理的・文化的にも遠い国でこんなにも日本を好きでいてくれる人がいるんだ、と本当に嬉しい気持ち、日本文化を誇りに想う気持ちと同時に

に、自分の日本に関する知識不足や何もできない不甲斐なさを感じることもあった。海外にいるといつも痛感することだが、ハンガリーは中でも特別で、これまで以上に強く私の中に残っている。

6. 今後に向けて

私は、国際交流基金の活動や日本語教育に関心があり、このインターンシップに応募したが、予想をはるかに上回る学びの多い刺激的な2週間だった。

ハンガリーの日本語学習者に会い、彼らの勉学・自身の将来に対する真剣な姿勢は本当に立派で眩しく、見習わなければならないと思った。また、センターの方々、ハンガリーで日本語教育に尽力されている先生方のおかげで、日本語・日本文化の発信に携わっていききたいと改めて実感したし、そのためにも常日頃から貪欲に動き、自身の日本語教育の専門性も高めていく必要性を強く感じた。そして今後は日本の発信だけでなく、日本におけるハンガリーのプレゼンス向上、日本・ハンガリーのつながりの深化のために、自分にできることを探して実行していきたい。

以上のような気づきに加えて、内面に関しても大きな成長を感じることができた。壁にぶつかっても、積極的に動いたり周りに働きかけたりすることで道が開ける場合があるということ、この2週間は自分自身との戦いでもあったのだと思う。ハンガリーでのすべての経験は何ものにも変えがたいとても有意義でチャレンジングなものであった。このインターンシップで得られたものを活かし、自信を持って次のステップへ進んでいきたい。

7. 最後に -感謝の言葉

多くの学びをもたらしてくれた本インターンシップ実現のために尽力して下さった関係者の方々、ならびに本インターンシップを通して出会ったすべての方々に心より感謝申し上げます。このプログラムに参加できたことは私の誇りです。本当にありがとうございました。

